

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2022 年度
氏名	深町 うらら	指導教員 (主査)	杉本希映准教授

論文題目	学業領域固有の無気力を呈する大学生の大学生活への期待と現実のギャップと反応スタイルの検討
------	--

本文概要

【問題と目的】我が国の大学進学率は、2021年において54.9%となり、年々増加傾向にある（文部科学省、2021）。しかし、一方で、学修意欲が明確ではなかったりする学生の存在が指摘されている（松高、2016）。箭本・鈴木（2017）によると大学生の退学・休学の背景のなかで大きなものとしてスチューデント・アパシーを挙げている。スチューデント・アパシーについては、鉄島（1993）が「精神病の無気力とは異なり、心理的原因で主として学生の本業である学問に対して意欲の減退を示すこと」と定義して以降、多くの研究がなされている。しかし、使用されてきた尺度の多くは、学業領域におけるスチューデント・アパシー的な無気力と、領域全般的な抑うつ的な無気力が区別されておらず（狩野・津川、2011）、また、「やるべきことをやっていない」という状況の知覚を測定していない。また、大学生の学業領域固有の無気力における規定要因として、環境要因である大学生活への期待と現実のギャップと共に、個人要因である反応スタイルが考えられる。狩野・津川（2011）は、大学生における無気力をスチューデント・アパシーと抑うつからの視点から区別して捉えているが、「やるべきことをやっていない」という状況の知覚的側面が検討されていない。そこで本研究では、狩野・津川（2011）に倣い学業領域固有の無気力と領域全般的な抑うつ的な無気力等とを分類して捉え、大学生活への期待と現実のギャップと反応スタイルとの関連を検討することを目的とする。

【方法】調査対象者：4年制大学に在籍する大学1・2年生280名（男性：70名、女性：204名、その他：6名；平均年齢19.60歳、 $SD=2.32$ ；1年生142名、2年生138名）。調査内容：①フェイスシート（年齢、学年、性別、大学の志望度、授業への出席率、授業への真剣度、課題への真剣度、生活の充実感、単位取得状況、成績状況）②学業領域固有の無気力状態測定尺度（大西、2016）③改訂版大学生用ストレス自己評価尺度の抑うつ情動的反応（尾関、1993）④Response Styles Scale (RSS)（島津、2010）⑤現実の大学生活尺度（千島・水野、2015）⑥大学生活への期待尺度（千島・水野、2015）で構成され、ギャップ得点は、「⑥大学生活への期待尺度－⑤現実の大学生活尺度」の得点で算出した。

【結果と考察】各群におけるギャップ特徴を明らかにするため、学業領域固有の無気力と抑うつとの4群とギャップの一要因分散分析を行った。また、各群における反応スタイルの特徴を明らかにするため、4群と反応スタイルの一要因分散分析を行った。以上の結果から、学業領域固有の無気力群は領域全般的な無気力群と比べギャップが小さく、想定通りの大学生活であったためギャップを感じることはないが、退屈さを感じており認知面での無気力に陥っていると考えられる。反応スタイルにおいては「否定的考え込み反応」、「問題解決的考え込み反応」が低く、「回避的気そらし反応」は高かった。したがって、この群は自分の現状を的確に捉え、考え悩むということができていないため、今後、卒業後の進路や就職を決めていく際、そして就業後には課題を抱える可能性が考えられる。ギャップへの対応としては、大学入学後も新入生オリエンテーション・プログラム（八城他、2013）や初年次教育、チューター制度を活用し学生に対しフォロー体制を整えることが支援策として考えられる。また、「回避的気そらし反応」を低減させるためには、分割的注意のスキルを高める訓練である注意訓練法が有効であるとされている（石川、2020）。「問題解決的考え込み反応」を高めるためには、援助者と一緒に解決に焦点を当てるソリューション・フォーカスト・ブリーフセラピーが有効であると考えられる。